

## 国勢調査と人種・民族の分類

青柳 まちこ

以前立教大学の大学院の授業で院生と一緒にエスニシティ関係の論文を読んでいた頃、次のような文章にぶつかった。「植民地政府が、彼らが誰である（ヌエルであるとかデインカであるとか）と彼らに告げるまで、エスニック統一体という意識が、ヌエル全員あるいはデインカ全員にいきわたって存在していたかどうかわかるほど、私たちは彼らのことを十分に知らないのである」。ヌエルはイギリスの人類学者エヴァンス・プリチャードによる多くの著作によって、少しでも人類学を学んだ人なら誰でも知っている有名な東アフリカの人々である。私たちはヌエルという人間集団が、初めからそこに存在していたように考えてしまいがちであるが、事実はどうもそうではないらしい。上記の文章はさらに続けて、植民地政府が統治の必要上、ある集団をヌエルと名付け、ある集団をデインカと名付けて分類していったことにより、それまでごちゃごちゃしていた小集団が、いわゆる「部族」という集団に整理されていった過程を示唆している。

同じようなことが国別の人口統計などについてもいえるであろう。私たちはA国の人口構成は白人何人、

## 国勢調査と人種・民族の分類（青柳）

黒人何人、先住民何人、B国の人口構成は中国系住民何人、アフリカ系住民何人、ヨーロッパ系住民何人といったような数字をよく目にする。このような数字はいったい何を根拠に算出されているのであろうか。またそのような分類はどのように行われているのであろうか。分類方式は国ごとに異なっているのではないかと。といったような疑問から「国勢調査・法制度にみられる人種・民族分類の比較研究」という共同研究を、現在三年計画で行なっている。今年はその二年目で、二〇人ほどの研究分担者がそれぞれの国の国勢調査における人種民族の分類方法、その分類基準、ないしは法制度におけるその規定方法などを調査し、定例の研究会で発表することになっている。

ここでは私自身がかかわったアメリカ合衆国の国勢調査について簡単に紹介してみよう。アメリカは一七九〇年以來、一〇年目ごとに国勢調査を行なっている。一七九〇年といえばワシントンが大統領に就任した一年後であり、いかにアメリカが国勢調査を重視していたかが想像される。もっともその目的は、それぞれの地域の人口に応じた議会代表と直接税の割り当てを行なうためであったから、急を要したのかもしれない。独立間もないこの時期、調査が行なわれたのは現在のアメリカ国土の約三分の一であり、現在の五〇州にわたる地域すべてについて調査が行なわれたのは一九〇〇年である。

今年二〇〇〇年四月一日にはその二二回目の国勢調査が行われた。調査票は四月一日に先立って全世帯に郵送され、各人は当日までに記入して返送するようになっていいる。短文調査票と長文調査票があり、短文は全世帯に、長文は六世帯に一通の割合で郵送される。四月一日までに未回収の調査票に関しては、国勢調査局から依頼された調査員が各世帯を回って回収するのであるが、毎回この未回収の調査票が大きな

問題となってくる。とくにここ数回の調査では回収率が低下し、一九九〇年度は回収率六五%、二〇〇〇年度は五五%まで下がるのではないかと予測されていた。そのため今回は回収率をあげるためにさまざまな技術的な工夫がなされたが、その一つが質問をできるだけ簡単にすることであった。

短文の調査票では、世帯主(次表にみられる Person 1)は(一)同一世帯内の人数、(二)家屋の所有形態、(三)名前、(四)電話番号、(五)性別、(六)生年月日、(七)Spanish / Hispanic / Latino、(八) race の八項目に回答することが求められている。他の世帯員に対しては名前、世帯主との続柄、性別、生年月日、Spanish / Hispanic / Latino、および race についての質問がある。

通常日本の国勢調査に見られる職業や家屋の状況など面倒な回答はすべて長文の方に回されており、短文はきわめて短いものとなっているが、ここで私たちにとって面白いのはこのようなわずかな質問項目の中で「スペイン系か否か」、「レイスは何か」といった質問が入っていることである。

しばしばアメリカは多人種・多民族国家であるといわれる。国勢調査で人種・民族の分類に関する質問としては、前述のスペイン系、レイスの他に、長文調査には先祖についての質問があるが、ここでは短文調査に含まれる前二者についてのみ眺めてみよう。具体的な質問票の様式は、別表を参照していただきたい。

表：アメリカ合衆国 2000 年度国勢調査用紙の一部

---

⇒ NOTE : Please answer BOTH Questions 7 and 8.

7. Is Person 1 Spanish/Hispanic/Latino? Mark ☒ the "No" box if not Spanish/Hispanic/Latino.

- ☐ No, not Spanish/Hispanic/Latino    ☐ Yes, Puerto Rican  
☐ Yes, Mexican, Mexican Am., Chicano    ☐ Yes, Cuban  
☐ Yes, other Spanish/Hispanic/Latio—Print group. ✓

8. What is Person 1's race? Mark ☒ one or more races to indicate what this person considers himself/herself to be.

- ☐ White  
☐ Black, African Am., or Negro  
☐ American Indian or Alaska Native  
—Print name of enrolled or principal tribe. ✓

- ☐ Asian Indian    ☐ Japanese    ☐ Native Hawaiian  
☐ Chinese    ☐ Korean    ☐ Guamanian or Chamorro  
☐ Filipino    ☐ Vietnamese    ☐ Samoan  
☐ Other Asian—Print race. ✓  
☐ Other Pacific Islander—Print race. ✓

- ☐ Some other race—Print race. ✓
-

レイスないしカラーは一七九〇年国勢調査が開始された第一回から、一貫して登場する質問項目である。レイスは通常人種と訳されており、人種という用語は日本では文化的なまとまりである民族に対して、生物学的な人間の集団として理解されている。そして主として皮膚の色による三分類、もしくは四分類による人類分類が一般に受けとめられてきた。しかし近年は、主に遺伝学の立場から、そのような分類方法には学問的根拠がないとして否定されるようになり、「人種はない」という主張をする自然人類学者も多い。人種よりあいまいな概念を持つレイスについても、学問的な立場から、あるいはレイシズムに対する苦い反省から、その語の使用を控えようとするのが現在の世界的な趨勢のように思われる。

しかしアメリカの国勢調査では、レイスは二〇〇〇年においても堂々と使用されていた。ところで右表に見られるレイス分類が、私たち日本人が人種と考えているものとは大きく隔たっていることに気付くであろう。日本、韓国・朝鮮、中国というのは国名ではないか、あるいはフィリピンとかインドとかいってもしばしば人種が住んでいるのではないだろうかなどと私たちは考えてしまうが、一九七〇年の国勢調査には（その時の質問の項目名は、カラーないしはレイスとなっていたが）、以下のような解説があった。「ここで取り上げられているレイスは、科学的な定義とも、また生物学的な系株とも関係なく、回答者の自己申告による」。

回答者がこのように自己申告により自己のレイスを記入するようになったのは、一九六〇年、おそらくそれがより明確化したのは一九七〇年からであって、それ以前にはレイス分類は巡回してきた調査員によって行われていた。しかし調査者の携帯した手引き書には、どのような外見を持つ人を白人とし、どのよう

国勢調査と人種・民族の分類（青柳）

な外見を持つ人を黒人、あるいは中国人とするなどという親切な（？）説明は付せられていない。

混血については、これも調査時期により、あるいは対象とするレイスによってかなり任意的な分類が行われていた。たとえば純血のニグロ、ニグロと白人の混血はニグロに含まれた。しばしばニグロの血の一滴はニグロとなるといわれるが、外見がどのようなものであっても先祖に一人でもニグロがいればその子孫はニグロとなるという通念が、このような形で規定されていたのであろう。またアメリカ・インディアンとニグロの混血の場合も、前者との関係が著しく強い場合を除いてニグロとされた。白人とインディアンとの混血の場合は、当該インディアンの特定の部族の一員として登録されている、あるいは他の成員からインディアンであるとみなされている場合にはインディアンとなった。それ以外の非白人と白人の混血は非白人に分類され、非白人同志の混血は父系をとった。たとえば中国人の父と日本人の母との間に生まれた子供は中国人となった。合衆国の東部では白人、ニグロ、インディアン複雑な混血が行われてきた。一九五〇年以前の調査では彼らはニグロないしはインディアンに任意的に分類されてきたが、一九五〇年の調査ではその他の集団に、また一九六〇年にはインディアンに分類されることとなった。

おそらく混血の問題はこのような分類を行なうにあたってのもっとも担当者の頭を悩ませる事項であろう。近年は自己申告となったため、回答者は自分の思うとおりのレイスで申告する。一九八〇年、アルバートで未回収調査書の回収に当たった知り合いの女性は、どう見てもブラックとしか見えない人がホワイトに印を付けていたりする場合があると話をしていた。またこれは誤解であろうが、アジア系インド人の両親が、アメリカで生まれた子供に、アメリカ・インディアンと印を付けたという事例も報告されている。

厄介な混血の分類を止めて、いつそのこと混血という項目そのものを作ったかどうかという意見の中にはある。しかしこれにはマイノリティ集団からの強い反発がある。数は力である。一万人の人口集団と百万人の集団では政治的発言力も補助金の交付額も違ってくるであろう。しかしこの点に関して、二〇〇〇年の調査でこれまでの記入方法と決定的に異なるやり方が取り入れられた。それは四頁の表にみられるように複数のレイスのカッコに印を付けることを認めたことである。一九九〇年まではどれか一つのカッコに印を付けることが要求されていたので、二〇〇〇年におけるこの変化が、どのような結果をもたらすのか興味ある点である。

(七)の「スペイン系か否か」という質問項目は、スペイン系アメリカ人からの強い要求によって一九八〇年(一九七〇年には試験的にサンプル調査が行われた)から導入された。一九七〇年の時点ではスペイン系の定義は、州により、スペイン語話者、スペイン姓保持者、プエルトリコ出身者、中・南米出身者などといういろいろであったらしいが、これらの該当者はほぼ一致しているのであろう。当然のことながらスペイン語話者にはホワイートもブラックもまたその混血もいる。この質問が二〇〇〇年調査で(八)番目のレイスについての質問より前に置かれたのは、この問い掛けがすべての人を対象としたものであることを明瞭にし、回答率をあげることを目的としている。アメリカ合衆国の人口統計などで、ホワイートやブラックと並んで、ヒスパニックというカテゴリーが共存しているのは何とも奇妙に見えるが、多数のスペイン語話者を抱えるアメリカの特殊事情であらう。

ついでながら、長い植民地統治の経験を有し、また国内に多数の旧植民地からのマイノリティ集団を有

## 国勢調査と人種・民族の分類（青柳）

するイギリスでは、意外なことに一九九一年の国勢調査までこのような人間集団を分類する方式は存在しなかった。この時の国勢調査ではさまざまな分類方式が試行錯誤された上で、ホワイト、ブラック・カリビアン、ブラック・アフリカン、その他のブラック、インディアン、パキスタン、バングラデシュ、中国人、その他のアジア人、その他という一〇種の類別が実施された。ここではレイスではなく、エスニック集団という名称が用いられ、また複数選択ができるようになっていた。

人種あるいは民族という言葉にはなにか重々しい響がある。「同じ血が流れている」とか、「民族の尊厳にかけて」などという言葉は、それだけで他者には侵すことが出来ないような聖域を築き上げる。しかしこのような人間集団は実のところ、為政者によって作り上げられたか、あるいは他集団との関係性の中で自発的に作り上げられていった、きわめて状況的な集団であるようである。私たちが現在行なっている共同研究を通じて、こうした人間集団の流動的な実態が明らかになっていくことを期待している。

（本学名誉教授）